

同志社が生んだ図書館人 —同志社図書館山脈の源流と先駆者達

宇治郷 毅

はじめに

『同志社山脈—113人のプロフィール』という本がある。2003（平成15）年1月に、同志社山脈編集委員会が『同志社大学広報』（同志社大学刊）連載の「人物点描」の81編と新たに書き下ろした32編を加えて113人の同志社人を取り上げて出版したものである。同志社の教育理念を体現して各界で活躍した同志社卒業生と同志社関係者の人物紹介である。この中に図書館界で活躍した卒業生として唯一湯浅吉郎（半月）の名を見出すことができるが、本書では芸術分野で活躍した人物として扱われている。残念ながらこの本では登場しないが、本学には、1875（明治8）年の「同志社英学校」発足以来幾多の有力な図書館人を輩出してきた歴史がある。本稿は宏大な同志社山脈を形成する一支脈とも言えるいわば「同志社図書館山脈—同志社が生んだ図書館人」の紹介である。これは基幹の連峰から見れば小さな山脈かもしれないが、まぎれもなく同志社130年余の歴史の一部を形成し、ここで活躍した図書館人は日本の図書館界にさまざまな貢献を果たしながら今日に至っているのである。

本稿の構成は、同志社図書館山脈の源流とそれから形成された三つの大きな峰から成る。源流は、前史に当たり「新島襄と同志社図書館—同志社図書館山脈の源流」として扱われる。第一の峰は、主に戦前の図書館界で活躍された方、又は戦後活躍されずでに物故された先輩図書館人たちの紹介からなる部分である。これは第一部「同志社図書館山脈を築いた人達—今は亡き先人たち」として、多くの諸先輩の中から湯浅吉郎、竹林熊彦、大佐三四五、小畑涉、中島智恵子、重久篤太郎、松井正人、栗原均の8名を取り上げる。これらの方は、長く公共図書館や大学図書館の現場で働き、その活動の中で独自の図書館学を築いていった人達である。その追求した領域は異なるが、共通して現場実践を重視しており、いわば「現場の図書館学」といった性格を共通にもっていた。また竹林熊彦や小野則秋等に見られる「図書館史」、大佐三四五に見られる「図書館学史」の重視等は、これらの人の図書館運動と図書館学の根拠に歴史実証主義の存在を見てと

することもできる。

第二の峰は、同志社大学司書課程を形成してきた人達が築いたものである。この部分には、同志社大学司書課程の生みの親であり、その基礎を作った小野則秋、始めて司書課程の専任教員となり、新しい情報学の導入に努めた吉田貞夫、そして現在の司書課程の枠組みを構築した青木次彦、さらにそれを発展させ、現在の司書課程を完成させた渡辺信一らがいる。この中で小野則秋は、戦前は「同志社大学図書館学研究会」、戦後は「同志社大学図書館学講習所」、「同志社大学図書館学会」「同志社夏期大学図書館学」「同志社大学司書課程」を主催し、本学の図書館学発展の基礎を築いただけでなく、多くの著作活動により日本の図書館学の発展にも大きな功績を残した。この意味で小野は「同志社図書館人物誌(1)」に入れるべきであったが、「同志社図書館人物誌(2)」の方に入っている。

なお本稿で敬称は省略している。

第三の峰は、現在の図書館界で活躍されている図書館人から成る。すでに第一線を退いた方もあるし、現職で活躍の方もいる。本学では、正確な数は不明であるが、把握できる範囲だけでも現在200名をこえる卒業生があらゆる館種に及ぶ図書館界で活躍している。この中から、人物誌の対象として公共図書館界では伊藤昭治（元茨木市立中央図書館長、元阪南大学教授）、加藤三郎（元名古屋市名東図書館長、元滋賀文教短期大学教授）を、大学図書館界では、東條文規（元四国学院大学図書館員）、井上真琴（元同志社大学図書館司書、現同大学学習支援・教育開発センター事務長）を、学校図書館界では、家城清美（元同志社女子中学・高等学校司書教諭）を、専門図書館界では、小出いづみ（財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター長）、国立図書館では、宇治郷毅（元国立国会図書館副館長）を、出版界では、松居直（元福音館書店社長・会長・現顧問）を、さらに海外の図書館界での事例として、鎌田均（米国アリゾナ大学図書館司書）を取り上げる予定である。この方達は、同志社図書館人物誌一(3)「新しい同志社図書館山脈を築く人達」として、稿を改めて扱われる予定である。なお現在、他大学の司書課程教育と図書館学研究にたずさわっている多くの優れた本学出身の教員がいるが、本稿からは割愛している。

前史一新島襄と同志社図書館—同志社図書館山脈の源流—

1、新島襄と図書館

同志社山脈の源流が本学創立者新島襄にあるように、同志社図書館山脈の源流もまた新島襄その人にある。その源流には、二つの泉がある。一つは新島襄の優れた図書館認識であり、いま一つは新島の存命中に建設された同志社大学図書館（現有終館）である。

新島襄の優れた図書館認識はその生活体験の中で培かれたものと思われる。彼自身決して当時の図書館学の勉強をしたわけではないが、当時日本の先覚者の中では抜群の豊富な図書館利用体験を有していた。新島は幕末明治初期において、外国で正規の大学を卒業した最初の人であり、彼の図書館認識は、自ら学んだフィリップスアカデミー、アーモスト大学、アンドヴェアー神学校の図書館利用体験だけでなく、余暇を盗んで訪れたアメリカ各地の大学図書館、学校図書館、公共図書館、専門図書館見学から培われた。さらに岩倉具視遣外使節団の文部理事官田中不二麿の通訳兼顧問として欧米の教育調査に参加したことは、当時近代図書館への発展過程にあった欧米の各種図書館の姿を知る絶好の機会となったと思われる¹⁾。この体験は新島の図書館認識をより深めることになり、彼の畢生の事業となった大学設立の中に大学図書館を必須かつ重要施設として位置づけることにつながった。新島はアーモスト大学在学中の経験を次のように述べている。

「然れども苟も学業の余暇あれば必ず諸州を歴遊し、山河を跋涉し、努めて建国の規模を探り、風土人情に通ずるを以て事とし、至る処の大中小学より、博物館、書籍館、盲啞院、幼稚院、其の他百工技芸の講習所、百種物産の製造所に至る迄、概ねこれを検閲し、或いは諸州の学士、有名の人物に接見し、親しく其の議論を聴くを得て、大いに悟る所あり。」（「同志社設立の始末」明治16年4月執筆、『新島襄教育宗教論集』岩波文庫、p48）

ここで述べられている「書籍館」は現在の図書館のことで、欧米の Library は当時そう呼ばれることが多かった。豊富な図書館体験をもった新島ではあったが、直接図書館について記述したものはそう多くはない。しかし次の二つの言及は、彼が図書館を大学にとっていかに重要な機関として認識していたかを示す重要な文章である。

第一の言及は、「我が校の（教育）方針」と題した1885（明治18）年2月13日にアメリカン・ボード本部のN・G・クラーク博士あてに書かれた英文書簡の中に見出される。

「私たちの永久の標語には三つの要素がある。

- 一、我々の礎石としてのキリスト
- 二、良教師
- 三、良き図書館と精良な器機

この三つの要素が我が校の真の明輝である²⁾。」

第二の言及は、「日本伝道促進についての私案」と題した英文書簡の中に見出される。これも、アメリカン・ボードに提出されたものである。新島は、同志社に最もさし迫って必要なものとして、11項目をあげているが、その第9項目、第11項目で図書館について言及している。

「九、図書の充実、ならびに読書室を備えた使いよい図書館の設置。あらゆる分野にわたる書物、特に近代科学、哲学、歴史、卓越したキリスト者、政治家、慈善家等の伝

記、および聖書の注解書のさらなる充実。若い卒業生たちが教師の指示の下で本校に滞在し、図書館で研究できるようにしたい。

十一、物理・化学用の器具をふやし、図書館に新刊を備えるための、毎年の補助金³⁾。」

ここでは、あらゆる分野にわたる図書の必要、その中にキリスト教徒などの伝記、聖書注解書などを指摘しているのはキリスト教主義を理念に掲げる学校の図書館としては当然であるが、それを強調しているところは注目すべき点である。また新刊の必要性、使いやすい図書館であること、恒常的に保障されるべき図書購入費に言及している点も重要である。さらに卒業生が研究のために図書館を利用できることをも提唱している点は、新島が大学図書館の研究機能を認識していたことを示す点で注目される。以上の二つの言及は、新島が大学における図書館が必須の存在であるだけでなく、その蔵書内容の充実の必要性を認識し、それ以上に利用者にとって使いやすいものでなくてはならないこと、そのためには不断の大学自らの努力が必要であることの認識を示している。新島は近代の大学図書館の本質を十分に理解していた一人であったと言えるであろう。

〈注〉

- (1) 新島襄の日記や紀行（英文、日本語）からは、訪問した図書館の名をかなりの数確認できる。また新島は図書館で一番大事なものは蔵書であると考えていたようで、わかるものはその蔵書数と履歴を記録している。次が新島が訪問した図書館とその記述である。
 - ・アメリカ「ペンシルバニア州刑務所」では、受刑者が図書館から本を借り出すことができる。（『新島襄全集 7 英文資料編』「Travel with Commissioner Tanaka」p41）
 - ・アメリカ「アンドヴァー神学校」の図書館で歓迎された。（同上書、p44）
 - ・イギリス「エジンバラ大学図書館」蔵書が10万冊である。（同上書、p60）
 - ・イギリス「オックスフォード大学図書館」訪問。（同上書、p68）
 - ・スイス「ベルン市立図書館」スイス軍がフランス軍から奪取した刺繍された本を見学。（同上書、p76）
 - ・ロシア「サンクト・ペテルスブルグ公共図書館」蔵書が10万冊あり、多くの古い写本を見学、ボルテールの著書はキャサリン2世によって購入された。（同上書、p80）
 - ・イタリア「ローマ市立図書館（羅馬府書籍館）」蔵書45万卷、「ローマ大学図書館」蔵書9万卷（『新島襄全集 5 日記・紀行編』「第二回外遊紀」明治17年5月23日、p326）
 - ・ハーヴァード大学図書館の蔵書は13万4千冊。（『新島襄教育宗教論集』「キリスト教主義高等教育機関設立のために」p89）
- (2) 原文は、『新島襄全集 7 英文資料篇』（学校法人同志社）p328、に掲載されているが、ここでは鎌田研一編『新島襄 わが人生』日本図書センター、2004、p180の訳によった。
- (3) 原文は『新島襄全集 7 英文資料編』p355、引用は『新島襄教育宗教論集』（学校法人同志社）p224、による。

2、同志社大学図書館

1875（明治8）年11月29日に、「官許同志社英学校」として産声をあげた本学にあって、

当初より図書館の占める地位は大きかった。そのことは新島襄の上記図書館認識の実践であったととらえたい。設立当初は、校舎の建築に追われ、図書の実にまで手が回らなかったため、新島と教師の J. D. Davis (デイヴィス) がしばらくの間自己所有の蔵書を学生に公開していた^①。しかし学校創立の翌年1876 (明治9) 年9月には、早くも小規模なものとはいえ「書籍縦覧室」が設けられている^②。その後、本格的な図書館が1887 (明治20) 年11月に「同志社書籍館」(現有終館) として開館した。開館式では、奉獻祈禱を D. C. Greene (グリーン)、記念演説を金森通倫、祝禱を J. D. デイヴィスが行った。本学にとって最初 (第1代) の図書館がキリスト教の祈りの中で誕生し、列席の有力者に対して同志社精神が披瀝されたことは意義深いことであった^③。しかしこの建物は教室としても使用され、二階西方の一室を「書籍室」として各種資料を備置したものにすぎなかった。その後、1918 (大正7) 年9月に第一期の新図書館が開館 (書庫部分)、第二期として1920 (大正9) 年5月鉄筋コンクリート煉瓦造4階建ての優美なる本館が建築・開館 (現啓明館) した。第2代図書館時代の出発であった。1917 (大正6) 年に始めて館長制を導入した。この時期より、図書館が学園全体の総合図書館としての歩みを開始した。そして戦後1973 (昭和48) 年には今出川校地に第3代としての現図書館、1986 (昭和61) 年京田辺校地に「ラーネッド記念図書館」が建設され今日に至っている。このように本学の図書館は幾多の変遷をへて発展してきたが、さまざまな事情により停滞の時代もあったし、かつまた順調に発展した時代もあった。組織的変遷、蔵書数の増加、蔵書の内容の変化、図書整理方法の変遷と改良、建物・施設の改善、サービス方法の改善、職員の配置などの面で、それぞれの時代において、大学当局、教職員、学生、校友、篤志家など有名、無名の多くの人々の祈りと熱誠に支えられ発展してきたことを忘れることはできない。その詳細についてはここでは記す余裕がないので、小野則秋による『同志社大学図書館学会紀要』掲載の論文を嚆矢として^④、また『びぶりおてか』(同志社大学図書館刊) 掲載の詳細かつ要を得た記事によって知ることができるので、それに譲りたい^⑤。

しかし上記論文・記事でもふれられているが、本学歴代の図書館の建物及び蔵書は多くの教職員、学生、校友、篤志家の努力と芳志によって構築されてきた点はぜひともここで書き留めておかねばならない。もちろんこの点について大学当局の努力があったのは言うまでもないが、しかしそれ以上に特に戦前においては学内外有志の図書館に寄せる熱情と努力が大きかったことは特に強調しておきたい。いわばこれらの人達は、新島襄から流れ出た源流に一滴、一滴の貴重な水を注ぎ込んだ人達であり、これらが集まり小川となり、さらに大きな流れとなって今日のわが図書館が作られてきたことを銘記しておきたいのである。

校友、教職員、篤志家などにより寄贈開設された文庫には次のものがある。本学にお

ける文庫は、長い歴史の中で多くのものが一般蔵書の中に組み込まれたことも付記しておく。なお文庫としての名をもたないまでも多くの有志からの寄贈による多数の図書が蔵書に混排されていることも忘れてはならない。

「小室沢辺記念文庫」(1889(明治22)年、5,146冊、寄贈功労者：中島信行、木村栄吉、松本誠直)、「植木文庫」(1893(明治26)年、植木枝盛旧蔵書806冊)、「新島記念文庫」(1893(明治26)年、3,826冊)、「森田記念文庫」(1901(明治34)年、森田久万人旧蔵書など769冊、横井時雄など)、「フrint記念文庫」(1907(明治40)年、260冊)、「校友文庫」(1908(明治41)年、676冊)、「愛山文庫」(1917(大正6)年、山路愛山旧蔵書3,568冊)、「大原孫三郎」、「三宅文庫」(1919(大正8)年、滝本誠一旧蔵書1,370冊、三宅利平)「小林文庫」(1925(大正14)年、1,011冊、小林正直)、「吉田文庫」(1933(昭和8)年、吉田作弥旧蔵書586冊)、「岡田文庫」(1933(昭和8)年)、「安東偉人文庫」(1934(昭和9)年、安東長義)、「原田文庫」(1934(昭和9)年、原田助旧蔵書720冊)、「横田文庫」(1935(昭和10)年、横田安止寄贈図書154冊)、「村上文庫」1935(昭和10)年、村上小源太旧蔵書)、「加藤文庫」(1935(昭和10)年、加藤小太郎旧蔵書)、「高柳文庫」(1936(昭和11)年、高柳松一郎旧蔵書)、「生江文庫」(1945(昭和20)年、生江孝之旧蔵書、2,700冊)、「蘇峰文庫」(1947(昭和22)年、徳富蘇峰旧蔵書1,900冊)、「浮田文庫」(1948(昭和23))、「デントン文庫」(1948(昭和23)年)、「荒木英学文庫」(1958(昭和33)年、荒木和一旧蔵書、約20,000冊)、「新島旧邸文庫」(1957(昭和32)年、新島襄旧蔵書など、約1,700冊)、「竹林文庫」(1961(昭和36)年、竹林熊彦旧蔵書、文書類3,034点)、「ケーリー文庫」(1974(昭和49)年、947冊)、「下村文庫」(1974(昭和49)年)、「中野譜庫」(1985(昭和60)年)

このように本学の長い歴史の中でその時期その時期に多くの特徴のあるコレクションが寄贈されてきたことは感謝すべきことであるし、同時に誇るべきこととも思うのである。また第2代の図書館本館(現啓明館)が、1918(大正7)年校友山本唯三郎の多額の寄付により完成を見て、開館したことも特筆大書しておかねばならない。

ただ本学図書館の蔵書構築については、最後に付言しておかなければならないことがある。それは、本学の蔵書についてかつて小野則秋の厳しい批判があったことである⁶⁾。それは、本学の蔵書が明確な蔵書計画に基づいたものではなく、その時期ごとの「実用一辺倒」であり、また原典、定本に対する「書誌的関心の欠如」が存在し、図書経費が「各部割拠主義」に陥っており、構築が「無性格的成長」になっているという指摘である。これは小野の大学と図書館への愛情から出た言葉であり、まことに正鵠を射た指摘であった。この指摘は、その後の大学当局も図書館関係者も常に心すべきことであったと思われるが、はたしてこの批判を克服できているであろうか。ともかくも小野の批判よりすでに50年が過ぎた。そして図書館をとりまく環境は大きく変化した。今や図書館

は激しいグローバル化と情報化の波の中にあり、日に日にデジタル資料が図書館資料の中でその比重を増している。しかし上記のコレクションをはじめとする印刷資料は本学図書館の命である。現在のわれわれ図書館関係者は、これを大事に未来の同志社人に、大きく言えば日本の文化のために継承していく必要がある。新しい情報環境の中で、小野の言葉を「頂門の一針」と受け止めて、新島の源流から流れ出た水脈を大河へと育てていくべき時ではなからうか。

〈注〉

- (1) 小野則秋「同志社大学図書館発展史」『同志社大学図書館学会紀要』1輯、1957、p2
- (2) 本学図書館の起源をなす「書籍縦覧室」の記事の初見は、明治12年5月28日付京都府学務課長による「同志社視察之記」であった。その特徴は、自由接架方式の閲覧室で利用しやすかったこと、少数ではあるが和洋新聞雑誌、図書（主に洋書数百部）という内外の研究資料が備置されていたこと、さらに洋新聞は宗教関係のもの、洋図書も聖書などキリスト教関係書が中心であったことが特徴であった。「書籍縦覧室」については、重久篤太郎「京都府からみた同志社」（『明治文化と西洋人』p198）中の「同志社視察之記」の箇所而言及されている。
- (3) 『同志社文学雑誌』第7号、明治20年11月10日、p38
- (4) 小野則秋「同志社大学図書館発展史」『同志社大学図書館学会紀要』第1輯、1957、p1～39
- (5) 「同志社大学図書館の歴史」その1～その14、『びぶりおてか』No.1（1967. 7. 1）～No.24（1978. 10. 1）
- (6) 小野則秋「同志社大学図書館発展史」『同志社大学図書館学会紀要』1輯、1957、p35

〈参考文献〉

- 小野則秋「同志社大学図書館発展史」『同志社大学図書館学会紀要』第1輯、1957
- 阪田蓉子「大学昇格と同志社大学図書館」『転換期における図書館の課題と歴史』緑陰書房、1995
- 「同志社大学図書館の歴史」その1～その14、『びぶりおてか』No.1（1967. 7. 1）～No.24（1978. 10. 1）
- 『同志社九十年小史』（第十節「大学図書館」）学校法人同志社、1965
- 『同志社百年史 通史編二』（第七章 研究施設と研究活動「図書・文献・資料について」）学校法人同志社、1979

第一部 同志社図書館山脈を築いた先駆者達

【1】湯浅吉郎（ゆあさ・きちろう）—わが国の公共図書館近代化に貢献した文人図書館長（生没年：1858～1943）

〈京都帝国大学附属図書館に勤務〉

湯浅吉郎（号は半月）は、1858（安政5）年群馬県安中に生まれた。1877（明治10）年9月同志社英学校普通科に入学し、卒業後同学校神学科に進み、1885（明治18）年6月卒業した。この年10月兄湯浅治郎の援助で最初の著書『十二の石塚』を出版した。こ

の本は日本近代詩史上最初の個人詩集であり、新体詩として好評を博すとともに、その後日本における長編叙事詩の時代を誘発したと評価されている⁽¹⁾。続いて同年オベリン大学神学科（1885～1888在学）に留学し、「神学士」の学位を得た。さらにイエール大学古代言語学科（1888～1891在学）に学び、「Doctor of Philosophy」を取得した。1891（明治24）年帰国後、同志社英学校教授となり、英文学、ヘブライ文学、旧約聖書文学等を講じた。1899（明治32）年平安教会牧師に転じた。1901（明治34）年5月、新設の京都帝国大学の木下広次総長に招かれて、京都帝国大学法科大学講師となり、同大学附属図書館に勤務した。湯浅の図書館界との関係はここから始まった。京都帝国大学附属図書館では、「図書（館）事務」に従事した⁽²⁾。



写真提供：同志社大学図書館

〈シカゴ大学図書館学校に留学—日本人として海外で初めて図書館学を修める〉

湯浅は京都帝国大学及び京都市より図書館学の研究を委嘱され、また自ら図書館学研究の必要を感じて、1902（明治35）年8月シカゴ大学に留学した⁽³⁾。当時この大学の図書館学校には、図書館学関係科目が4科目設置されていた。湯浅は通算約6ヶ月滞在、「図書館経営史その他」「整理技術」の二科目を履修し、卒業時英語による論文「日本図書館史」を提出し、卒業した。卒業後欧米の図書館見学をしたのち帰国した⁽⁴⁾。竹林熊彦は湯浅のシカゴ大学留学について、「邦人でアメリカの図書館学校で正式に課程を修めて卒業したのは彼を嚆矢とする」とみなし、またこの欧米での体験が、京都府図書館（京都府立図書館、京都図書館ともよばれる）での実践につながったと評している⁽⁵⁾。

〈京都府図書館長として、市民に開かれた近代公共図書館の実現を追求〉

欧米の図書館視察をおえて帰国、1904（明治37）年4月京都府図書館長に就任した。在職中の1909（明治42）年4月に、それまでの御苑内の博覧協会の間借りから岡崎公園の一角に優美な近代建築を新築し、移転、開館したことは、現在の府立図書館に直結する大きな功績の一つであった。この新館で湯浅は多くの新事業を意欲的に行い、戦前における府立図書館の基礎を固めた。新事業としては、閲覧室の改善、開架制の導入、分類法の改正、巡回文庫の実施、館外貸し出しの実施、児童閲覧室の開設、新刊図書の掲示、各種の展覧会の開催などがあった。

湯浅の活動は、当時の日本にあってまことに革新的であった。それは竹林熊彦が評するように、市民への奉仕を中心とした公立図書館の建設であった⁽⁶⁾。その根底には、徹底して「利用者と資料を結びつける」というアメリカで学んだ市民的な図書館思想があったと言えよう⁽⁷⁾。

湯浅がおこなった諸事業は、現在ではごくありふれたものではあるが、100年前の我が国ではまことに斬新なものであった。その革新性は、竹林が指摘するように、市民に対する奉仕思想に裏打ちされていたと言えるであろう。特に、市民の本へのアクセスを効果的に保障するための開架制の導入と巡回文庫の拡大、児童閲覧サービスの導入、分類法の改正、各種の展覧会開催の5点は高く評価できよう。

このうちでも特に1905（明治38）年の児童閲覧室の開設は、公立図書館としては1902（明治35）年の山口県立図書館に次ぐ日本では最も早い児童サービスであったこと、かつ無料制、公開書架、利用規則の簡便さ、新刊児童書の提供、児童室専任館員の配置などの点で先進的な取り組みであった⁸⁾。

また1904（明治37）年10月の十進分類法による「和漢図書分類表」の導入は、それ以後の図書整理の効果をあげることに貢献した⁹⁾。

さらに盛んに行われた各種の展覧会は、展示物の公開による教育的効果だけでなく、市民の図書館への親近感の増大と理解を進めるのに役立った。この展覧会で集められた図書から『京都叢書』（16冊、1915～16）が刊行されたが、郷土資料の蓄積に貢献した。

湯浅は、1916（大正5）年同図書館を退職した。

〈同志社大学図書館への貢献〉

湯浅は、府立図書館長在職時、1912（大正元）年同志社図書館の図書整理顧問となり、デューイの十進分類法を日本化した『同志社図書館蔵書分類』の編纂などで図書整理の近代化に尽力した。この分類表は、デューイ十進分類法の日本への移入の初期の一つであった¹⁰⁾。また1914（大正3）年には新図書館建築委員として図書館専門家の立場で新館（現啓明館）建設に貢献した。

〈その他、図書館界への貢献〉

1918（大正7）年単身上京、早稲田大学図書館長市島謙吉の推薦により早稲田大学図書館顧問となり、3年間勤務した。1921（大正10）年からは俳優組合事務所に勤務、「俳優図書館」の設立に努力したが、関東大震災のため設立に至らなかった。1943（昭和18）年2月逝去した。湯浅の図書館界での業績は、主に京都府立図書館時代にあり、それは近代公共図書館の理念を初期の公立図書館の場に定着化させ、日本公共図書館運動の先駆者の一人であったと評価できるであろう¹¹⁾。

〈注〉

- (1) 河野仁昭「湯浅半月（吉郎） 近代個人詩集出版の嚆矢」『同志社山脈』2003、p194
- (2) 『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館、1961、p74で「図書事務」、p135で「図書館事務」を嘱託したとする。どちらの箇所も「第2章 図書の整理」であるから、その関連の業務に従事したと思われるが、具体的な仕事内容については不明である。なおこの点について、竹林熊彦「湯浅吉郎と図書館事業」（1）（『土 金光図書館報』50号、1957. 9、p8）では、へ

- プライ語の能力を買われて採用された、としている。
- (3) 湯浅のアメリカ留学のいきさつについては、井上裕雄「湯浅吉郎研究ノート」(『図書館界』1969. 7、p57)の優れた考察がある。井上は、湯浅の再留学について、竹林熊彦の推測、すなわち湯浅が留学帰国後京都府立図書館長に就任するという大森京都府知事との「極秘の密約」説を否定し、京都帝国大学と京都市の委嘱留学説をとっている。本稿はこれに拠った。
- (4) J. R. モリタ「湯浅吉郎研究覚え書き—シカゴ時代を中心として」『図書館界』18(3)、1966. 9、p71~72によると、湯浅の留学時代シカゴ大学には学部も学科もできておらず、設置科目も4科目で不十分なものであった。湯浅は図書館学ではA. ディクソン夫人の2科目しか聴講しておらず、むしろ英文学、宗教史、アッシリア語を学んでいる。「日本図書館史」の論文は、「図書館経営史その他」の科目に提出されたものという。また竹林熊彦著「湯浅吉郎と図書館事業」及び山宮允編「半月年譜」では、湯浅は卒業後、欧米図書館視察の折、オルバニー市の図書館学校で校長メルヴィル・デュエイから十進分類法を学んだとされているが、モリタは上記論文で否定している。おそらくデュエイとの接触は短時間の面談程度のものだったと推測される。
- (5) 竹林熊彦「湯浅吉郎と図書館事業」『土 金光図書館報』50号、1957. 9、p10
- (6) 竹林熊彦「湯浅吉郎の図書館思想」『図書館雑誌』51(4)、1957. 4、p146
竹林は、ここがかつて近代日本における図書館思想の性格について二つの系統があると述べている。一つは、田中稲城・和田万吉を代表する官立図書館・帝国大学の系統であり、いま一つは佐野友三郎・湯浅吉郎によって代表される公立図書館の系統であり、前者は施設を中心とした官僚的傾向をもち、後者は奉仕を中心とした市民的傾向をもつとした。
- (7) 湯浅の当時の図書館思想は、「近世的図書館の特徴」『大阪朝日新聞』(日曜附録図書館号、明治45年7月28日)等によく現れている。そこでは、近世的(現在から言えば、近代的の意味であろう)図書館の本質が「読者と書籍とを結合する」ことであると述べ、次の6点の特徴を指摘している。1、「自由図書館」(無料による公開)、2、「書庫の開放」(開架式閲覧と閲覧証の廃止)、3、「閲覧室と貸出法」(来館利用と貸出の併用)、4、「分館の制」(中央図書館以外に分館、配置所、受渡場の設置)、5、「児童閲覧室」(児童用図書の陳列と「主任者」(専任職員)による「読書の誘導」「図書の説明」「有益な談話」の実践)、6、「(公共)図書館と学校との連絡」(図書館の図書による教育支援、学校への図書の貸出、教員に対する図書館管理法の講習)の主張は、現代でも色あせていない。また湯浅吉郎「現代的図書館思想」(『同志社文学』5号、1929. 6)も、近代公共図書館のあり方を述べたすぐれた論考である。
- (8) 大塚志乃「湯浅吉郎—その図書館活動と思想」『同志社図書館情報学』6号、1995. 6
p44は、「湯浅は、児童サービスを慈善的・教育的なものとしてとらえていたが、児童におけるサービスは、90年も前とは思えない程のしっかりした土台の上に立ったものであった。」と評価している。
- (9) 井上裕雄は、「湯浅吉郎研究ノート—京都府図書館長就任と同館十進分類法」(『図書館界』21(2)、1969. 7、p58)で、「(湯浅吉郎は)京都府図書館と同志社大学図書館の分類表作成においては、その中心となり、また前述したとおり、京都帝国大学附属図書館の分類法にもその推進役として、我が国の初期の分類法の作成にはたした役割はまことに大きかったといわねばならない」と述べ、高く評価した。
- (10) 「大学図書館」『同志社九十年小史』p474及び「同志社大学図書館の歴史(その5)」『びぶりおてか』No.16、p5、参照。なおこの分類表は、1912(大正元)年以降使用されたが、1939(昭和14)年に完成した『同志社大学図書館分類表』におきかえられた。
- (11) 湯浅の図書館史上の歴史的評価については、次の二つが代表的なものであろう。第一は、積極

的に評価したもので、もっとも早いものは竹林熊彦であった。竹林は「湯浅吉郎と図書館事業」(1)(『土 金光図書館報』50号、p7)の中で、湯浅について「彼の生涯は行動半径が大きく振幅が広く、普通の図書館人のように初等数学的存在ではなく、むしろ複雑怪奇で、彼を理解しようとするならば、微分積分とかいう高等数学をもつてしなければならない。・・・詩人半月として彼が高く評価されているわりあい、図書館界ではそれほど買っていないのは、山下清流に兵隊の位で言うと、下士官的な多くの図書館人では割り切れない程に分母も分子も大きいからであろう。」と独特の辛口に乗せて高く評価した。埜上衛も「湯浅館長の夢は大きく、それは現代に通ずるものも多かった」(『京都府』『近代日本図書館の歩み 地方編』p464)と評価した。『図書館情報学用語辞典 第3版』(日本図書館情報学会用語辞典編纂委員会編、p244)は、「草創期の日本の図書館界で、児童サービス、集会活動(特に展覧会)、分館設置など斬新な図書館活動を展開、また明治末、教師に図書館の必要性を訴え、多くの小学校図書室の設置に貢献した」と評価した。第二は、一定の評価はするが、その限界を指摘したもの。石井敦は、「しかし、日本の図書館史の上にあっても、彼は見落とすことのできないいくつかの業績を残している。とくに1900年代、京都府立図書館長をつとめた時期に、近代的な公共図書館活動をわが国に定着させるために大きな功績があったのである。・・・湯浅の京都府立時代はわずかに十数年であったが、その活動は資本主義の発展途上にあった日本の社会に共感をもって迎えられた。それは山口県立の佐野友三郎の実践と相俟って、近代公共図書館のあり方を日本に現実化していく上で大きな礎石となったと言えるだろう。ただ彼の図書館思想は、公共図書館の本質を十分に捉まえたものではなかった。たしかに、彼の思想が府の財政事情や官治的地方団体の枠組みの中で展開しきれなかった点は気の毒であったが、彼自身の欧米での学習や見聞もやや表層的なものではなかったかと思われる。」(石井敦編『図書館を育てた人びと日本編Ⅰ』「図書館の大衆化に努力した文人 湯浅吉郎」p25)と批判的に述べている。

〈自著〉

- 『十二の石塚』湯浅吉郎、1883、『湯浅先生講演筆記』半井騰、1894、『箴言講義』基督教世界社、1907、『雅歌』警世社書店、1923、『大礼大観』大礼大観刊行会、1928、『コーヘレスの言』警世社、1928、『親鸞聖人絵詞伝』高桑余市、1930、『湯浅治郎傳』湯浅三郎、1932
「図書館員養成の必要」『図書館雑誌』1号、1907.10
「現代的図書館思想」『同志社文学』5号、1929.6
「図書館随筆」『中央公論』597号、1937など論文・記事多数

〈参考文献〉

(書誌・年譜)

- 山宮允編「半月年譜」『書物展望』13(11)、1943.11
青木次彦「半月湯浅吉郎書誌」『同志社大学図書館学年報』4号、1978
(図書)
石井敦編『図書館を育てた人々 日本編Ⅰ』日本図書館協会、1983(石井敦「図書館の大衆化に努力した文人 湯浅吉郎」収載)
半田喜作『湯浅半月』あさお社、1989
『近代日本図書館の歩み 地方編』日本図書館協会、1992(埜上衛「京都府」収載)
『図書館人物伝』日本図書館文化史研究会編、2007(高梨章「半月湯浅吉郎、図書館を追われる」収載)

(雑誌論文・記事)

- 竹林熊彦「半月先生断想」『書物展望』5(8)1935. 8
土井重義「図書館人としての湯浅半月」『学燈』53(2)、1956. 2
竹林熊彦「湯浅吉郎の図書館思想」『図書館雑誌』51(4)、1957. 4
竹林熊彦「湯浅吉郎と図書館事業」『土 金光図書館報』50～53号(1957. 9～1958. 7)、55～58号(1958. 11～1959. 7)
竹林熊彦「ディレクタント湯浅半月」『京都図書館協会々報』47号、1959. 10
J. R. モリタ「湯浅吉郎研究覚え書き—シカゴ時代を中心として」『図書館界』18(3)、1966. 9
青木次彦「湯浅半月覚え書」『日本古書通信』33(7)、1968. 7
井上裕雄「湯浅吉郎研究ノート—京都府図書館長就任と同館十進分類法—」『図書館界』21(2)、1969. 7
石井敦「先人を語る(11) 湯浅吉郎」『図書館雑誌』74(8)、1980. 8
藤田善一「湯浅吉郎と京都図書館分類表」『同志社大学図書館学年報』13号、1987
大塚志乃「湯浅吉郎—その図書館活動と思想」『同志社図書館情報学』6号、1995
石山洋「源流から辿る近代図書館史(18) 半月湯浅吉郎と図書館」『日本古書通信』67(6)、2002. 6

【2】竹林熊彦(たけばやし・くまひこ) —スカラー・ライブラリアンとして、図書館史研究の開拓者として大きな足跡を残す(1888～1960)

〈著者自伝〉

竹林は多くの著作の中で比較的到自己についてよく語っているが、まとまった自伝は無い。次は自らが著したもので、簡潔にして要を得、率直に心境が吐露されていて、この種のもの白眉であろう。

「京都帝国大学司書官。医を志して成らず、文学を修めて成らず、歴史を学んで成らず、新聞記者となりて海外に遊ぶこと二年、帰りに商店の小僧となり、たまたま図書館に拾われて目録に齷齪し、転じて学校教師となり、再び図書館に還って九州に留まること十有五年、私に鎮西八郎を以て任ず。二年前京都に転住し、山紫水明のほとりに老骨を養ひ、纔に餘喘を保つ、是れ余の経歴也。」
(「筆者紹介」『図書館論叢』第一輯、1942. 2、p183)



写真提供：同志社大学図書館

「明治21年2月11日、紀元の佳節、大日本帝国憲法の制定公布に先づ1年、呱呱の声を千葉県鴻台にあぐ。兄弟6人、早く父を喪い家道困難、外部の援資と労働により、辛うじて大学の門を窺う。性狷介、好んで独説を弄し、意志薄弱、しばしば職を転ず。口舌の徒のみ。大正5年、拾われて京大図書館の嘱託となり、月手当25円を給せられ、欣喜雀躍す。同志社大学予科教授となるも志を得ず、九州帝国大学司書官に任ぜられ、

ようやく心を図書館学に傾け、力を図書館史に注ぐ。留まること17年。京都帝国大学に転ぜしも意に満たず、ふたたび江湖に放浪して黄塵に老ゆ。著訳10巻、みな售れず。恩給亡国の民、ああ悲しいかな。」(「著者自伝」『図書館物語』東亜印刷出版部、1958、奥付)

〈ジャーナリストとして〉

1988(明治21)年2月に千葉県に生まれた。1907(明治40)年4月同志社専門学校文学科に入学し、1910(明治43)年3月に卒業した。続いて京都帝国大学文学部史学科選科にて西洋史を専攻した(明治43年9月～大正2年7月修了)。1913(大正2)年9月「日布時事」の記者、『布哇家庭雑誌』の編集主任、「毎日新聞」の特設通信員も兼ねた。1915(大正4)年7月帰国。京都帝国大学文学部史学科最近世史選科に入学し、1917(大正6)年9月修了した。京大では、文学部の国史担当の内田銀蔵教授に師事した。

〈図書館界に足を踏み入れる〉

1916(大正5)年9月より、京都帝国大学附属図書館嘱託として勤務した。図書館界に足を踏み入れた最初であった。新村出館長には学問においても師事した。週1日、主に整理業務に従事し、1925(大正14)年まで務めた。

大正5年末より著述活動を始めた。竹林の図書館関係の著作第一号は、『同志社時報』第139号(大正6年2月1日)掲載の「図書館中心論」である。この文章の中で「図書館が同志社の中心」であるべきと述べ、大学における図書館の重要性を大学当局に訴えた。後年竹林は権威や当局に鋭く直言し、警世の言でよく世論を喚起したが、その片鱗がうかがえる。

〈同志社で教鞭をとる〉

1919(大正8)年9月同志社大学予科教授となる。同大学学生監、同志社女子専門学校講師及び同志社中学校講師を兼務した。

〈九州帝国大学司書官〉

1925(大正14)年6月九州帝国大学附属図書館の司書官に任ぜられた。

1927(昭和2)年に「青年図書館員連盟」の結成に参加した。

1935(昭和10)年、帝国学士院より、3年間にわたり研究助成金を受けた。研究テーマは、「明治時代に於ける図書館の歴史的研究」であった。

〈京都帝国大学司書官〉

1939(昭和14)年10月、京都帝国大学附属図書館司書官に転じた。1942(昭和17)年8月まで勤務した。退職後、関西学院大学図書館司書、同中学教諭、同学院大学予科講師を務めた。

〈戦後の活躍〉

1946(昭和21)年11月、日本図書館研究会の創立に参加した。以後、菊花女子専門学

校主事・校長事務取扱、関西大学司書、同大学予科講師、京都市教育委員会指導委員を短期間であるが歴任した。また京大、九大、香川大、三重大、高知大、天理大で文部省図書館専門職員養成講習の講師、同志社大学図書館学講習所講師、京都女子大、大阪女子大の図書館学講師など図書館員養成に携わった。また堀川高校、日吉ヶ丘高校、紫野高校の講師を務めた。また京都図書館協会、京都学校図書館運動、盲人図書館運動、点訳友の会などの図書館運動に参加し、指導者の役割を果たした。京都図書館協会会長、京都盲学校点訳友の会会長、日本図書館協会顧問も務めた。

〈近代図書館史研究に捧げた生涯―“心を図書館学に傾け、力を図書館史に注ぐ”〉

竹林は、1917（大正6）年から研究成果を発表し始め、逝去する1960（昭和35）年までに多数の著作を残した。それらは8冊の著書、3冊の翻訳書、200余編の論文・随筆・記事を数える。その研究活動を見ると、初期（1917～1925年）には西洋史関係の論文を『歴史と地理』誌に発表しているが、本格的に図書館学の研究を始めたのは、九州帝国大学司書官となった翌年の1926（大正15）年12月に発表した論文「図書の整理と史学研究法」（『図書館雑誌』第85号）以後であることがわかる。竹林の論文・記事は、『図書館研究』、『図書館雑誌』、『図書館界』、『書物展望』、『学校図書館』などに主に発表された。

特に1933（昭和8）年以降は毎年数十編の論文・随筆・記事を精力的に発表している。竹林自身も『図書館物語』の中で、「九州帝国大学司書官に任ぜられ、ようやく心を図書館学に傾け、力を図書館史に注ぐ。留まること17年」と記している。この時期が最も図書館学研究に打ち込んだ時期であった。その研究熱は、京都帝国大学司書官となって以降も衰えなかったが、戦時中の1943（昭和18）年から1947（昭和22）年までは筆を断っている。戦後は1947（昭和22）年12月に「図書館商議会の設置要望」（『日本図書館研究会会報』第1号）を発表して以来、ふたたび堰を切った水のごとく図書館学のあらゆる分野にわたる論文・記事を発表するが、始めて研究対象となったテーマも多く、開拓者的役割も果たしている。

竹林の関心は、図書館学理論、図書館史の研究法、図書館思想史、西洋図書館史、図書館運動、図書館政策、図書館法・規則、図書館界の事情、図書館経営、点字図書館、盲学校図書館、児童図書館、学校図書館、病院図書館、行刑文庫、巡回文庫、私立図書館、図書館年報、婦人図書館員、図書館員の待遇、図書館員養成、司書教諭・教員司書、図書館用語、図書館資料、図書選択、目録法、総合目録、図書館奉仕、相互貸借、図書保存、日本図書館協会、関西文庫協会、図書館商議会、図書館学講習会、図書館大会、図書館と学校教育との関係、公共図書館と学校図書館の連携、など多方面のテーマに及んでいる。中でも、図書選択、図書館員（養成・待遇問題など）、学校図書館、点字図書館、図書館運動に関する論文・随筆・記事は戦前戦後にわたり多く、竹林の関心の深さがわかる。これらすべてにわたる論評はできないが、一つだけ例として図書館員に関

する論文を取り上げてみよう。図書館員の問題について、多くの論者が養成問題については述べるが、竹林はそれに終わらず婦人図書館員の問題、共済組合、待遇、勤務時間、休暇、健康問題、資質（専門性など）、研究精神の必要まで論じている。たとえばこの中の一論文「健康第一主義と研究的精神」（『図書館雑誌』25（6）、1931. 6）では、図書館員の資格として第一が健康、第二が社交性（奉仕第一主義の精神）、第三に知識（語学と専門知識）と研究的精神（学問的研究の手段方法についての理解）をあげている。竹林の図書館員をめぐる諸問題についての微に入り細にわたる論及は、現場の図書館員として長く働いた中で考察されてきたものであって、そこには竹林の図書館員に対する熱い期待と愛情が読み取れる。かつて石井敦は、竹林を評して「social democrat」と評した¹⁾。竹林の「寸鉄人を刺す」と評される既成社会の権威に対する批判精神も、図書館員であることの自負と図書館の文化を擁護したいという正義感からきていると思われる。そしてその底には、不屈の研究精神と図書館への深い愛情があったと思われる。

竹林の研究の中心は、多くの研究者が指摘するように、日本図書館史、中でも近代図書館史に置かれていた。著書の『近世日本文庫史』（大雅堂、1943）や論文「近代日本図書館の史的研究（1～33）」（『土 金光図書館報』第29号～第63号、1953. 12～1960. 5）などはその代表的な成果であった。そこには近代図書館を成立させているさまざまな事象が取り上げられ、社会との関係、図書館の先史との相関関係が批判的に考察され、歴史的教訓を導き出そうとする努力があった。竹林は自己の歴史研究の目的が歴史を「かがみ」として自らを把握するためであると述べ²⁾、また未来につながる現在が過去とどんな関係にあるかを明らかにするためであるとも述べている³⁾。竹林が発掘し、あるいはさらに深めた図書館に関わる事物・事件と人物は数多い。特に『土 金光図書館報』で取り上げられた人物、田中稲城、戸山正一、湯浅吉郎、片山潜などの人物研究は異彩を放っている。一つの未知の事象を明らかにするために竹林が払った膨大な時間と刻苦の上に現在の日本の図書館史研究がある。

竹林の執筆活動と図書館運動への情熱は、逝去の直前まで衰えなかった。逝去3年前に書かれた次の言葉は、すべての図書館人への激励の言葉であり、いつまでも忘れてならない言葉でもあろう。最後まで「滄溟を開く気概」を失わなかった人と言えよう。

「図書館人はよく縁の下の力持ちだという。謙虚もよいことにちがいないが、もっと



下鴨の竹林先生宅にて
右 石井敦氏 左 竹林熊彦先生
(日時不明、写真提供は酒井忠志氏)

胸を張って世間に長嘯したらどうであろう。杜甫の「短歌行」に「鯨魚浪を跋（ふ）んで滄溟開く」とある。滄溟を開く気概だけは忘れたくないものである。」（『図書館史研究閑話』『土 金光図書館報』第48号、1957. 5）

〈竹林文庫のこと〉

1961（昭和36）年に、故人の遺志により、遺族竹林晴彦氏より同志社大学に竹林熊彦が生前収集した資料や手書きコピーの原稿など全3,034点（この中に田中稲城文書1,339点も含む）が寄贈された。この文書には、竹林が執筆した論文・随筆・記事や全国各地の図書館講習会の講義等の下原稿作成のために集められた資料と図書、新聞、雑誌から抜き書きした手書きコピーが収められている。また竹林が近代日本図書館の形成者の一人である田中稲城（初代帝国図書館長、初代日本文庫協会会長）の研究のために田中家の遺族から寄贈された文書史料も含まれている。現在同志社大学図書館に整理所蔵され、一般に公開されている。本学図書館が誇るべきコレクションの一つである。

〈注〉

- (1) 石井敦「竹林先生を悼む」『図書館雑誌』54（12）、p477。ここで「先生の essays それは自分でも「毒舌」と云われていたが、全く寸鉄人を刺すものが多い。しかし、底に貫かれている一本の赤い糸は social democrat の理念である。公共図書館の有料制に対する執拗な反対、図書館界を毒する官僚思想の徹底的な排除など、これらはいたるところに展開されている。」とある。
- (2) 『近代日本文庫史』大雅堂、1943、p1
- (3) 「児童図書館の史的研究」『土 金光図書館報』29号、1953. 10、p3、ここで「われわれが歴史に関心をもつのは、未来につながる今日の問題が過去とどんなつながりをもっているかを明らかにしたいからである。」とある。

〈自書〉

『近世日本文庫史』大雅堂、1943、『書物をなでて』文芸復興社、1948、『図書館経営入門』（日本図書館学叢書第1編）京都出版、1948、『教員司書のために』（日本図書館研究会ブックレット第9冊）綜文館、1948、『特殊図書館』（新日本図書館学叢書第15巻）蘭書房、1955、『図書の選択』（新日本図書館学叢書第4巻）蘭書房、1956、『図書館の対外活動』（新日本図書館学叢書第3巻）蘭書房、1956、『図書館物語』東亜印刷株式会社出版部、1958、他に翻訳書3篇、論文200余篇

〈著作目録〉

酒井忠志、桎上衛、広庭基介、古原雅夫、村上勉共編「故竹林熊彦先生図書館関係著作論文目録」『京都図書館協会々報』54号、1960. 12
高橋重臣、中川晃次郎共編「竹林熊彦先生著作目録」『芸亭』12号、1972. 8
青木次彦、加藤参郎共編「竹林熊彦先生年譜試稿」『同志社大学図書館年報』6号、1980

〈参考文献〉

『京都図書館協会会報』54号、1959. 8（特集号：田中周友ほか12名の追悼文収載）
小野則秋「竹林熊彦・その人と業績」『土 金光図書館報』66号、1960. 12

- 間宮不二雄「顧問竹林熊彦先生を偲ぶ」『図書館雑誌』54 (12)、1960. 12
石井敦「竹林先生を悼む」同上書
加藤参郎「竹林熊彦先生を偲んで」『愛知図書館研究会々報』33号、1960. 11
佐藤貢「図書館学者としての竹林熊彦」『中部図書館学会誌』2 (2)、1961. 2
岩猿敏生「竹林熊彦の日本図書館史研究について」『同志社大学図書館学年報』6号、1980
埜上衛「竹林先生の思い出、そして自省」同上書
重久篤太郎「竹林熊彦氏と私」同上書
富永牧太「竹林先生のこと」『芸亭』(天理大学図書館学研究室)12号、1972. 8
岩猿敏生「戦前のわが国における図書館員問題の展開 付竹林熊彦先生をしのんで」同上書
広庭基介「図書館史の開拓と基礎づくりに半生を捧げた人—竹林熊彦」『図書館雑誌』76 (11)、1982. 11
岩猿敏生「戦後の図書館学についての回想—竹林・小野先生の業績にふれながら—」『同志社大学図書館学年報』17号、1991
井上真琴、小川千代子「アーカイブ資料整理へのひとつの試み—同志社大学所蔵田中稲城文書・竹林熊彦文書の場合」『大学図書館研究』77号、2006. 8
岩猿敏生「九州と三人の図書館史家—竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄」『図書館学』93号、2008

【3】大佐三四五（おおさ・みよご）—植民地で活躍した図書館学究（1899～1967）

〈コロンビア大学で図書館学を学ぶ〉

1921（大正10）年3月同志社大学英文科を卒業し、すぐ中国に渡り、満鉄本社に就職した。大連図書館が勤務部署であった。1925（大正14）年9月に2ヶ年の海外修学を命ぜられ、1926（大正15）年10月コロンビア大学図書館学部（Columbia University School of Library Service）に入学した。留学目的は、アメリカにおける目録法と図書館業務の研究であった。1927（昭和2）年6月B. S.の学位を取得した。続いて同大学大学院で学び、1928（昭和3）年6月にM. A.の学位を取得した^①。

卒業後、3ヶ月間欧州の図書館を視察後帰国した。

〈満鉄図書館で活躍する〉

1928（昭和3）年9月、満鉄大連図書館に勤務した。続いて、満鉄撫順図書館長（1930. 6～1936. 1）として、『撫順図書館報』創刊、撫順における満鉄諸機関の総合目録作成、利用者重視の館外貸出業務を軌道に乗せた。1936（昭和11）年2月満鉄大連図書館司書係主任に復帰後は、中支那占領地区接収図書整理のため上海、南京に出張したり、また北京新民会中支指導部接収図書整理のため北京、天津に出張したりした。

大佐の満鉄時代の大きな業績の一つに、『洋書目録法の理論と実際』（日本図書館協会、1937）の刊行がある。当時の日本の図書館ではALA（アメリカ図書館協会）目録法の翻訳と簡単な手引きしかなかったが、本書は日本ではじめて洋書目録法の全般について理論紹介と実例の紹介を試みたものとして貴重である。谷口寛一郎は、この本は「既刊の田中敬氏の「和漢書目録法」と好一對をなす出版物であった」と評している^②。

1941（昭和16）年2月満鉄退社後、同月北支那開発株式会社調査局に勤務した。また続いて内閣所管調査研究動員本部資料部勤務（1943. 1～1945. 5）を経て、日本外政協会参事調査局資料課長（1945. 6～1946. 1）として勤務した。この間、文部省図書館講習所講師（1942. 4～12）を務めた。1941（昭和16）年5月日本図書館協会総裁賞を受賞した。

このように満州での大佐の活躍ははなばなしいものがあったが、しかし植民地における日本の図書館活動には批判もあり、大佐もその評価から抜け出すわけにはいかない³⁾。

〈京都学芸大学附属図書館事務長として活躍〉

大佐は戦後、図書館現場で働いただけでなく、文部省や大学の図書館員養成にたずさわわり、また著作活動も活発に行った。同時に、京都図書館協会などを舞台に図書館運動も展開した⁴⁾。

米国赤十字米軍将校倶楽部図書館長（1946. 1～9）、京都 CIE クルーガ図書館長（1947. 6～7）、京都府社会教育課長（1947. 8）、京都府総務部文書課長（1948. 9）をへて、1949（昭和24）年9月京都学芸大学附属図書館事務長となった。この間、京都大学文学部講師（図書館学）、文部省主催図書館専門職員養成講師、文部省学校図書館司書教諭養成講座主事を務め、図書館員養成に尽力した。1961（昭和36）年3月大学を退職後、松下電器本社社史編纂室に勤務した（1961～1966）。1961（昭和36）年11月に日本図書館協会より表彰された。

〈図書館学関係の多くの著作を刊行〉

戦前戦後を通じて、大佐は図書館学理論、学校図書館、大学図書館、図書館員養成、資料整理・検索・活用法、目録法、社史編纂などについての著作や論文を意欲的に発表した。中でも、『図書館学の展開』（丸善、1954）は、図書館学の発展過程を通史的に叙述した研究としては戦後最も早い著作の一つであり、その後の図書館学発展の一助となったと言えよう。またアメリカの目録法、図書館員養成など図書館事情の紹介で貴重な論考を残している。

〈注〉

- (1) 大佐のコロンビア大学図書館学部での留学体験は、「コロンビア大学図書館学部にて在学の思出ばなし」『図書館雑誌』25（6）、1931. 6に掲載されている。この体験談は、当時のアメリカの図書館学校の内実を知りうる極めて貴重なものである。コロンビア大学図書館学部は、1886（明治19）年にメルヴィル・デューイによって米国最初の図書館学校として創立されるが、2年後にニューヨーク州立図書館内に移り、以後37年間「ニューヨーク州立図書館学校」として存続した。そして1926（大正15）年10月再びコロンビア大学にもどり図書館学部となった。大佐が入学したのは、まさにこの新生学部の第一期生としてであった。施設としての教室、学習室、教育としての教科目、教授、学生数、単位、授業の進め方、授業料、学生生活としての寮など詳しく報告さ

れている。1926（大正15）年の図書館学部の開校式に、メルヴィル・デューイ博士が登壇し、回顧談を語ったが、その内容も記録されている。

- (2) 谷口寛一郎「図書館学究故大佐三四五君を憶う」『図書館界』19（5）、1968. 1、214
- (3) 大佐の満州時代の活動については、鞆谷純一「満鉄図書館と大佐三四五」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』5号、2004が詳しい。この中で鞆谷氏は、「戦後の日本図書館を大佐三四五ら満鉄図書館出身者が背負ったということは、明白な事実である。満鉄図書館の活動には、図書館ネットワークの形成など先進的な図書館活動という注目すべき点があったが、他方では戦時下の中国図書の接収に象徴されるような「侵略性」もあった。植民地支配と戦争から派生するさまざまな事柄が、結果として我が国の図書館界の人材育成に繋がったのである。」と述べている。満鉄時代の大佐に対する評価として妥当なものであろう。
- (4) 大佐は、『京都図書館協会々報』の編集責任を昭和20年代に任めている。また、本紙に以下の記事を書いている。「図書館学の認識」同会報、18号、1953. 3、「学校図書館法と司書教諭の問題」同会報、21号、1954. 3、「読書週間に備えて」同会報、29号、1955. 10

〈自著〉

(図書)

『洋書目録法の理論と実際』日本図書館協会、1937

『図書館学の展開』丸善、1954、

『資料の整理と目録の作成』山本書店、1958

『教育資料の検索と活用』山本書店、1961

『社史の編纂と作成』山本書店、1967

(論文)

「On the libraries in Japan」(A. L. A. Papers and proceedings of the 48th annual meetings, at Atlantic City and Philadelphia. Oct.4-9, 1926)

「Some libraries of Japan」(L. D. Arnett, ed.: Readings in library methods. New York. G. E. Stechert. 1931)

「輓近欧米図書館事業の趨勢と我国斯道の将来に就て」『図書館雑誌』23（9～11）、1929. 9～11

「世界的良書」『図書館雑誌』24（10）、1930. 10

「コロンビア大学図書館学部に在学の思出ばなし」『図書館雑誌』25（6）、1931. 6

「満蒙を中心とする文献目録に就いて」『撫順図書館報』3（8～10）、1932. 8～10

「アメリカ合衆国に於ける図書館員養成の歴史的背景と最近に於ける其の動向の検討」『図書館雑誌』29（1）、1935. 1

「英米目録規則に対するボンサ氏の修正案」『図書館雑誌』29（7）、1935. 7

「占領地区に於ける図書文献の接収と其の整理作業に就て」『図書館雑誌』32（12）、1938. 12

「現下学校図書館の諸問題と其の対策」『図書教育』2（5）、1950. 5

「我国図書館事業の革新を指導せる米国図書館人の足跡」『土 金光図書館報』20号～22号、1952. 2～1952. 6

「大学図書館論—大学図書館の自主性」『図書館界』4（3）1952. 11

「我国図書館学の発展に対する基盤」『学術月報』5（8）、1952. 11

〈参考文献〉

- 谷口寛一郎「図書館学究故大佐三四五君を憶う」『図書館界』19（5）、1968. 1
鞆谷純一「満鉄図書館と大佐三四五」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』5号、2004

【4】小畑涉（おばた わたる）—図書館統計研究の開拓者（1908—1958）

〈同志社図書館に勤務—小野則秋を支える〉

1908（明治41）年、京都府富野荘村に生まれた。府立桃山中学、京都師範学校二部を卒業し、小学校訓導として京都市七条小学校に勤務した。1939（昭和14）から書記として同志社大学図書館に勤務し、在職中の1958（昭和33）年に逝去した。

小畑の功績は、図書館勤務のかたわら小野則秋の対外的な図書館諸活動を陰で支えたことである。小畑の支えが無かったら、小野の戦前、戦後の華々しい活躍も不可能であったかもしれない。戦前小野が全国の大学に先駆けて結成した図書館員の研究組織である「書物研究会」及び「同志社大学図書館学研究会」の有力メンバーとなった。また戦後は、1946（昭和21）年10月の「同志社大学図書館学講習所」開設にあたり、企画、実施面で小野を助けて活躍、講師も務めた¹⁾。1947（昭和22）年11月より1950（昭和25）年まで京都図書館協会の事務所が同志社大学図書館内に置かれた時は、その庶務事務を担当した。また同志社大学図書館に私立大学図書館協会関西役員、日本図書館研究会の事務局が置かれた時も、その事務を担当した。

〈図書館統計研究の開拓者〉

日本の図書館界でそれまで重視されず、見過ごされてきたものに図書館統計の研究がある。小畑は、図書館勤務の余暇を活用して図書館統計法の研究を進め、この分野の著書としては日本で初めてのものである『図書館統計法入門』京都出版株式会社、1950（昭和25）年を世に問うた。内容は、社会統計の本質、図書館統計概説（一般統計法の基本概念）、蔵書統計、利用統計、経営統計、統計図表、結語の7章から成り、巻末に索引が付されている。

天野敬太郎はこの本について、「図書館統計の単行本は本書が嚆矢であり、欧米にも余り見ない稀な専門研究の入門書である。従来この種の論文の発表も少なかったので、本書の著述の苦心は察するに余りがある。それだけにこの特殊な分野の開拓者という栄誉を得たわけである。」と高く評価した²⁾。

〈ダウンズの同志社大学訪問に応接する〉

イリノイ大学図書館長ロバート・B・ダウンズが、1950（昭和25）7月11日同志社大学を訪れた。訪問目的は、日本に「高級図書館学校」（英語では「New Library School」と表現されている）を創立するために、候補大学の一つである本学にGHQの考えを説明し、意見を求めるためであった。この時本学側で対応したのが同志社大学図書館司書の小畑であった。司書の多田光も同席した³⁾。

ダウンズの候補大学調査は、東京では東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、京都では京都大学、同志社大学を対象に行われ、最終的に慶應義塾大学に決定した。この経緯についての研究は多数あるが、本学についての記録としては、小畑の「小畑涉ダウンズ

氏と一問一答（対談）」『図書館雑誌』44（8）、1950. 8、しか見出すことができないので、この記録は貴重なものである。質問項目は、学校の立地都市、独立の学校か学部の所属にすべきか、学校設備、入学資格と学生の種類（一般学生以外に現職図書館員と文部省認定講習講師も可能か）、学位（学士か修士か）、米人教員、日本人教員の留学、米国の援助が終わった後の独自での継続の可能性、国の補助などであったが、これらは候補大学に共通した質問項目であったであろう。特に本学の場合で興味深いやり取りは次の2点であった。小畑が、学校は東京と京都との二ヶ所にすべきである、その理由は一ヶ所では日本の民主化のために望ましくない、と意見を述べたのに対し、ダウンズが「東京の予定である」と述べていることである。いま一つは、小畑がなぜ同志社大学を候補にしたのかという問いに、「日本でも有数の有能図書館だと承知しているから」と応えている点である。このやりとりの流れから見て、ダウンズの本学訪問は、候補地の東京決定を最終的に確認するための作業の一つであったとも考えられる。

〈注〉

- (1) 小野則秋「物故者紹介 小畑渉氏」『京都図書館協会々報』66号、1963. 3、p5
- (2) 天野敬太郎「書評 小畑渉：図書館統計法入門」『図書館界』3（4）、1952. 4、p154
- (3) 「小畑渉ダウンズ氏と一問一答（対談）」『図書館雑誌』44（8）、1950. 8、p178～179参照

〈自著〉

(図書)

『図書館統計法入門』京都出版株式会社、1950

(論文)

「同志社大学図書館ノ書物研究会ニ就テ」『田研究』16（1）、1943. 10

「蔵書統計への一考察」『図書館界』2（2）、1950. 9

「図書館統計論」『図書館界』1（3）、1949. 10

「小畑渉ダウンズ氏と一問一答（対談）」『図書館雑誌』44（8）、1950. 8

「図書館法改正案の提唱—学校図書館法草案—」『土 金光図書館報』15号、1951. 4

「図書館教育本質論」『図書館界』3（1）、1951. 6

〈参考文献〉

- 大塚鑑「新刊図書紹介 小畑渉「図書館統計法入門」」『図書館界』2（3・4）、1951. 2
- 天野敬太郎「書評 小畑渉：図書館統計法入門」『図書館界』3（4）、1952. 4
- 小野則秋「物故者紹介 小畑渉氏」『京都図書館協会々報』66号、1963. 3

【5】中島智恵子（なかじま・ちえこ）—女性図書館長の草分けとして活躍（1924～1999）

〈滋賀県立図書館に勤務〉

1924（大正13）年、京都市に生まれた。1949（昭和24）年に同志社大学文学部文化学

科を卒業した。1949（昭和24）年滋賀県庁に就職し、児童相談所に勤務しながら、同志社大学の夏期大学図書館学や東京大学での司書講習を受講し司書資格を取得した。1962（昭和37）年滋賀県立図書館に移り、この時より終生図書館業務にたずさわることになった。1982（昭和57）年まで滋賀県立図書館にて勤務し、小林重幸、坂口正司、前川恒雄の三館長に仕えた。坂口館長時代に読書運動、特に子どもの読書運動が推進されたが、担当者としてたずさわる。「子どもの本の講座」、「絵本研究会」、「児童読物研究会」を開催し、県内各地の児童図書研究会や児童奉仕の支援、文庫作りに協力し、滋賀県の読書運動、児童サービスの発展に貢献した。中島は、県立図書館時代について、「図書館と私」（『回想・私と図書館Ⅱ』日本図書館協会、p194）の中で、「私は、偉大でユニークな、歴代館長のもとで勤務させてもらったご縁に心から感謝している。図書館運営についての重要な視点を教えてもらったことは、現在、一市立図書館を運営する館長として役立つことばかりであった。」と回想している。奉仕課長を最後に長浜市立図書館へ移った。

〈女性図書館長として活躍〉

1982（昭和57）年4月長浜市立図書館開設担当主幹（課長級）となる。1983（昭和58）年3月開館、初代館長となる。女性図書館長の草分けの一人であった。図書館長として、利用者優先の図書館奉仕をかね、貸出サービスと児童奉仕に力を入れた。図書館が「地域の灯台として光を放つ」ことを目指し、図書館奉仕においては、（1）利用者の立場に立つて行うこと、（2）利用者と心を通わせる対話を忘れないこと、（3）本を大切にすること、の三つを方針として実践した¹⁾。また女性管理職としての資質と能力に必要なものとして、仕事に対する知識と技術の習得、有効な人的協調関係の構築、働きやすい職場環境の造成、女性の知恵と創造力の発揮、気配りと自己抑制、スマートさをあげている。そして「本物の人間的魅力をもつ女性館長として、市民の限らない知的ニーズに応えていきたい」と決意を述べている²⁾。まさにこの精神で草創期の市立図書館の基礎を固め、その後の図書館発展の道を切り開いた。1993（平成5）年に退職した。当時女性館長は全国的にも少なかった。中島は、図書館現場出身の館長として、またすぐれた業績を残したことで、多くの女性図書館員に励ましと希望を与える存在となった³⁾。

〈図書館員養成にたずさわる〉

1994（平成6）年より滋賀文教短期大学教授となり、司書課程で図書館員の養成に尽力した。同大学図書館長も歴任した。

長年にわたる滋賀県における図書館振興や文化振興の功により滋賀県文化奨励賞（1989）、文部大臣賞（1990）、日本図書館協会賞（1991）、全国公共図書館協議会会長賞（1994）を受賞した。

〈児童文学作家、放送作家、民話研究者として活躍〉

日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会、日本民話の会、日本放送作家協会の各会員として活動し、著作としては「中島千恵子」のペンネームで、滋賀県の民話、昔話や創作絵本、随筆など多数を残した。

〈注〉

- (1) 中島智恵子「管理職としての女性図書館長」『現代の図書館』24（4）、1986.12、p210
- (2) 同上論文、p211
- (3) 神谷伸子「公共図書館の職員構成—女性は図書館の半分を支える」『現代の図書館』24（4）、1986.2によると、1985年4月現在で、女性職員は全体の職員数の49%を占めるが、女性図書館長は推定であるが3.7%（60人）としている。貞閑晴（東京都立中央図書館長）を除くと、他に女性図書館長の実例が不明なので、中島のケースは貴重なものである。

〈自著〉

- 『タブーの島』（毎日新聞社、1969）、『近江の民話』（未来社、1980）、『近江のわらべうた』（第一法規出版、1982）、『三吉ダヌキの八面相』（PHP 研究所、1986）、『おはなぎつね』（京都新聞社、1989）、『よみがえった梅の木 盆梅のふるさと』（岩崎書店、1991）、『母子草』（京都新聞社、1992）他多数。
- 『回想・私と図書館』（「図書館と私」収録）、日本図書館協会、1992
（共著）
- 『古寺巡礼 近江7 長命寺』（「長命寺散策」収録）株式会社淡交社、1980
（論文）
- 「管理職としての女性図書館長」『現代の図書館』24（4）、1986.12
- 「公共図書館における児童サービス—女性図書館長としての回想—」『同志社大学図書館学年報』21号、1995
- 「近江と戯曲について」『滋賀文教短期大学紀要』移転開学20周年記念号、1995.4

【6】重久篤太郎（しげひさ・とくたろう）—図書館員・学校教員の二足のわらじ生活で明治文化史、英文学及び書誌学に功績を残す（1903～1984）

〈京都帝国大学附属図書館事務嘱託として〉

1903（明治36）年、京都市に生まれた。1929（昭和4）年3月同志社大学文学部英文学科を卒業した。京都帝国大学附属図書館事務嘱託として、1929（昭和4）年9月～1941（昭和16）年6月まで勤務した。主に洋書整理の仕事にたずさわった。一時新村出館長と笹岡民次郎主事の指導を受けた。またこの図書館で司書の天野敬太郎や谷口寛一郎に出会い、終生親交をもった。

1934（昭和9）年より3ヶ年にわたり帝国学士院の学術研究補助費を受けて、来日欧米人に関する資料収集と研究に従事した。また同志社高等商業学校で教員としても勤務した（1931（昭和6）年4月嘱託講師、1936（昭和11）年4月助教授、1938（昭和13）

年教授、1941（昭和16）年6月辞職）。重久は、この時期の自分を「私は図書館事業に力を入れることを希望された（竹林熊彦）先生の期待にそうこともなく、学校教員と図書館員の二足のわらじをはいた生活を続けていた」と回想している⁽¹⁾。

この二足のわらじ生活は、東北帝国大学司書官時代も変わらなかった。

〈東北帝国大学司書官として〉

1941（昭和16）年6月、東北帝国大学司書官に任ぜられた。1949（昭和24）年8月東北大学司書官を辞職した。

〈書誌学に業績を残す〉

重久の学問的業績が、日本英学史と明治文化に寄与した欧米人の事績についての研究にあるのは衆目の一致するところである。それらの業績は、日本英学史研究では、主著である『日本近世英学史』昭和16年があり、また欧米人研究では、主著である『お雇い外国人—教育・宗教』昭和43年や『お雇い外国人—地方文化』昭和51年がある。

ところで重久は、通算20年間にわたり図書館に勤務していたわりには図書館関係の論著が少ない。しかし書誌学関係では多くの業績を残している。重久の書誌学研究の多くの成果は、「大英図書館あれこれ」（『明治文化と西洋人』収載）「図書館と私」（『籍苑』第8号、1979.10）に見られるようなあくなき文献探索意欲からきている。まさに地の果ても遠しとせず収集に情熱をもやした人である。重久は、「図書館と私」というエッセイの中で、「情熱をもって収集すれば、資料の方から自然と集まってくるものだ」と云っている⁽²⁾。重久にとって、収集という行為は、埋もれた事実の発掘、または不明確な事実の検証のためにどうしても必要な作業でもあったのだ。

収集の成果は、論文・記事として著書『明治文化と西洋人 重久篤太郎著作集』に収められている。本書の第二章「書物と文学」には、重久の内外文献に対する造詣の深さと書物に対する愛情の深さがよく現れている。一例をあげると、「ケーリー文庫と稀覯本」は、オーテス・ケーリとフランク・ケーリ父子二代にわたり収集され、同志社大学図書館の特別文庫（「ケーリ文庫」）として寄贈された欧文文献資料約1,000点を紹介した優れた論文である。この文庫は、17世紀から19世紀前半にかけての日本と極東に関する欧文文献資料、特にプロテスタント史関係資料、キリシタン関係資料、日欧交渉史関係古刊本、来日西洋人の日本研究書など貴重なものを含み、本学洋書の中でも異彩を放っているが、その書誌的解説となっている⁽³⁾。

また、『明治文化と西洋人 重久篤太郎著作集』に収録されている図書館人との交流の記事も面白い。たとえば天野敬太郎（京大図書館司書、関西大学図書館司書、書誌学者、主著は『本邦書誌の書誌』）との「書誌的交遊」を綴った「天野敬太郎と私」では、「明治文化関係欧米人名録」（『図書館研究』1937.10月号）の共同編集の思い出など40年にわたる交流が綴られている⁽⁴⁾。

さらに竹林熊彦との交流は、「竹林熊彦と私」に綴られているが、同窓としての公私にわたる篤い交遊、中でも帝国大学図書館の司書官同士の交流は戦前の帝国大学図書館界の一面（帝国大学附属図書館協議会の活動など）を伝えていて興味深い⁽⁵⁾。

また重久における「京都愛書会」での活動も忘れることはできない。この会は、幕末・明治史に関する資料の蒐集、研究を目的として1937（昭和12）年から2年間活動し短命に終わったが、『開化』なる機関誌を刊行し、重久も「京都療病院とショイベ」なる地方における外国人の貢献を記録している。重久は、明治期において外国人が日本の地方社会の近代化に果たした役割を丹念に発掘紹介しているが、これもその中の一つとして評価できる（『開化』昭和12. 12、昭和13. 1）⁽⁶⁾

〈その他図書館界、英文学界への貢献〉

1950（昭和25）年、京都市立美術大学助教授、同大学図書館長に就任した。（1953（昭和28）年4月まで）

1950（昭和25）年より1969（昭和44）年まで、同志社大学図書館学講習所講師及び同志社夏期大学図書館学講師として、図書館史、書誌学を担当した。他に、関西大学講師（図書館学）も務めた。

また、大手前女子大学教授、金蘭短期大学教授、日本英学史学会副会長（後に名誉会長）も歴任した。1974（昭和46）年、勲三等瑞宝章受章、1984（昭和59）年に逝去した。

〈注〉

- (1) 「竹林熊彦氏と私」『同志社大学図書館学年報』第6号、1980. 10 p14
- (2) 「図書館と私」『籍苑』8号、1979. 11、p2
- (3) 『明治文化と西洋人 重久篤太郎著作集』思文閣出版、1987、p134～138
- (4) 同上書、p292～295
- (5) 同上書、p312～315
- (6) 同上書、「京都愛書会のこと」p327～329

〈自著〉

（図書）

『お雇い外国人—教育・宗教』鹿島出版会、1968

『お雇い外国人—地方文化』鹿島出版会、1976

『明治文化と西洋人 重久篤太郎著作集』思文閣出版、1987

『重久篤太郎ノート 図書館関係資料の抜き書き』（手書き資料）、その他

〈論文〉

「東西洋書誌覚書」（『書物展望』1（4）、1931. 10

「新村先生のこと」『図書館雑誌』44（9・10）、1950. 9

「天野敬太郎氏と私」『天野敬太郎先生古希記念論文集 図書館学とその周辺』1971. 6

「図書館と私」『籍苑』8号、1979.10

「大英図書館あれこれ」『大阪瓊林』50号、1979.11

「竹林熊彦氏と私」『同志社大学図書館学年報』6号、1980.10

〈年譜・著書論文目録〉

井田好治編「重久篤太郎先生略年譜・著書論文目録抄」『英学史研究』17号、1984

〈参考文献〉

手塚竜磨「重久篤太郎君の急逝を悼む—英学史的視点からの回想—」『英学史研究』17号、1984

【7】松井正人（まつい・まさと）—チャレンジャー精神でアメリカ図書館界を駆けめ けた異色の図書館人（1929～1997）

〈同志社大学図書館に勤務—留学休職の職員第1号〉

1929（昭和4）年、岡山市に生まれた。1953（昭和28）年に同志社大学法学部法律学科を卒業した。同年、同志社大学図書館に就職した。分館の開架式閲覧室の閲覧業務にたずさわる。在職中、同志社夏期大学図書館学を受講した。この時の講師であった同志社大学図書館館長補佐兼事務長小野則秋の講義に感銘し、この時より小野に師事することになった。

1956（昭和31）年5月、大学より「留学求職」の身分で米国シラキュース大学大学院図書館学科（ライブラリー・スクール）に派遣された。留学の理由で派遣された大学職員の最初であった。当然帰国後の同志社大学での活躍が期待されていた。

〈シラキュース大学大学院図書館学科に学ぶ〉

大学では奨学金（キャデットシップ）を貸与されたが、それには図書館学の講義を受けると同時に図書館での週30時間の労働が義務づけられていた。図書館では製本係として働いた。生活のためにいろんなアルバイトをした。授業では、「レファレンス・ソース」「オーディオ・ヴィジュアルズ」「ブック・レビュー」「大学図書館行政」など、その他多くの科目を履修した。1958（昭和33）年5月にシラキュース大学大学院を卒業した。

貧しい生活であり、授業についていけるだけの語学力の習得努力と厳しい授業に苦勞したシラキュース時代であったが、しかし楽しく過した2年間でもあった。まさに「我が青春のアメリカ」を謳歌した大学生活であった⁽¹⁾。

〈同志社大学を退職する〉

松井は卒業後同志社での活躍を期待されていたが、母校図書館への復職を断念した。理由は、留学中にアメリカ永住の希望が強くなったからである。大学からは留学も1年延期してもらい、我が子のように可愛がり、励ましてくれた上司小野則秋のことを思って胸が痛んだ。しかし時の総長湯浅八郎は快く退職を認めてくれた。その時の総長の手

紙には、「同志社大学の名声を国際的に揚げるよう努力して下さい」と書いてあり、松井はいたく感激した、という²⁾。アメリカ留学経験があり国際人として苦労した湯浅八郎の懐の深さを示すエピソードである。松井は、1958（昭和33）年3月末日をもって同志社大学を依願退職した。

松井によれば、松井の留学条件は、帰国後大学で「図書館学」と「英語」を授業すること、であったという。そこには大学に「図書館学科」を設けるという下約束があったというのだ。松井はこの話をいろんなところに書いているが、現在のところ確証はとれていないので、本人が語った一エピソードとして紹介するに留める³⁾。

〈アメリカの大学図書館に勤務〉

これよりアメリカに留まることを決意した松井のチャレンジ人生が始まった。まずハーバード大学東洋図書館（エンチンライブラリー）日本部に司書として勤務した。未整理図書の日録作業に従事した。

次に、1962（昭和37）年にワシントン大学図書館に日本部長として移籍した。この間勤務のかたわら、ハーバード大学のカイミン・チュー博士、ミシガン大学のJ. W. ホール教授（「アーモスト大学学生代表派遣制度」によって同志社に滞在した経験がある）、プリンストン大学のM・ジャンセン教授など当代一流の学者に師事し、日本史、日米外交史などの歴史分野の研究をおこなった。この間、ミシガン大学大学院極東学科を修了した（1969）。

〈書誌編纂で学界に貢献〉

1964（昭和39）年ハワイ大学東西文化センター図書館に移籍し、1975（昭和50）年にはハワイ大学東洋図書館長となった。同大学アジア・アフリカ研究所所員も兼務した。

「faculty status」（教授待遇）となった。ハワイ大学では、元ハワイ大学夏期大学長阪巻駿三博士の指導を受けた。酒巻は1928（昭和3）年に「フレンド・ピース・フェロー制度」によって同志社大学に1年間滞在した経験があったため、松井とは親交を結んでいる。松井は、1975（昭和50）年にPh.Dを取得した。

松井はハワイ大学図書館時代に各種の書誌編纂に従事し、高い評価を受けている。それは琉球関係、日本芸能関係、南洋関係、北方領土関係、日本統治下の朝鮮関係の書誌作成であった。ハワイ大学には、琉球関係の「ホーレイ・コレクション」や日本人移民史の「梶山季之コレクション」など貴重な蔵書が多かった。松井は、書誌編纂に確たる信念を持って取り組んだ。それはハワイがアメリカ本土と離れているために、資料による図書館協力を進めるためには、「resource sharing（資源共有）」のための書誌編纂が必須であるという考えからである。そして一冊一冊の図書に英語の注釈（annotation）を付けた。このことによって松井の編纂した書誌はアメリカ国内で高い評価を受けた⁴⁾。

また日本からの研究者を親切に迎え、日米の学術交流、文化交流に多大な貢献をした。

〈ウイラード・ウイルソン (Wilard Wilson) 最高功労賞を受賞〉

松井は1983 (昭和58) 年に、ハワイ大学におけるアジア研究のレベルを向上させ、大学の名声を全米に高めたという理由で、ハワイ大学「ウイラード・ウイルソン (Wilard Wilson) 最高功労賞」を受賞した。松田ハワイ大学総長は、ライブラリー・スペシャリストとしての松井の功績を絶賛した⁶⁾。この受賞は、松井にとってアメリカでの業績が認められた最高の荣誉であったであろう。

〈「忘れ得ぬ人」 恩師小野先生〉

松井の人生に小野則秋の影響は大きい。彼の図書館への関心を引き起こし、図書館についての知識を与えてくれたのは直接の上司であった小野則秋であった。そして苦しかったアメリカ留学時代またその後のアメリカでの図書館勤務時代いつも励ましてくれたのも小野であった。松井にとって小野は仕事上だけでなくまさに人生の師であった。松井は恩師の死去に接し、次のように偲んでいる。

「今でも図書館の仕事には余りチャレンジを感じない私が、極東学や歴史学の方に移ることを考えなかった理由は、小野先生の影響だったのだなど。今も図書館に残っている私にとって、先生は数少ない「忘れ得ぬ人」なのである⁶⁾。

〈同志社大学での講演〉

松井は、1985 (昭和60) 年5月に本学を訪問して、本学司書課程の学生を対象に「日米比較ライブラリアンシップ考—主として米国の大学図書館事情を中心に— (述)」(『同志社大学図書館学年報』12号、1986に収載) の題目で講演した。松井のチャレンジ人生は多くの学生に感銘を与えた。図書館学の関係でもアメリカにおける図書館員の専門職制度の確立の背景、教授同格身分としての「faculty status」の実態、さらに図書館員は日常的な図書館業務以外にも何らかの学問的テーマをもって研究し、それを発表することの必要を指摘したことは学生達に大きな示唆を与えた⁷⁾。

また本学には、戦後間もなくから学生に広く内外の知識と教養を涵養してもらうために、内外からの著名な講師を呼んで講演してもらう「アッセンブリーアワー」が行われている。松井は、1995 (平成7) 年11月本学を訪問し、「我が青春のアメリカ 同志社からの旅立ち」という演題で講演した。

〈注〉

- (1) 『我が青春のアメリカ～挑戦～』 p125
- (2) 同上書、p149
- (3) 松井の留学条件については重要なことではあるが、不明の点がある。松井によれば、留学の条件に、帰国後同志社大学で図書館学と英語を授業することという条件がついていたというのだ。松井は、『我が青春のアメリカ～挑戦～』 p112で次の趣旨を述べている。小野則秋は、松井の同志社大学への復帰を待って、文学部に図書館学科を設け、同志社を中心として関西のライブラリ

アンの養成を計画していた、という。その時松井は「図書館学」と英語を担当するというのだ。同じ趣旨のことを、松井は「断片・アメリカ大学放浪記」(『同志社大学図書館学年報』10号、1984、p51)や「チャレンジャー 泣き笑い米国留学三十年」(『図書新聞』1984. 9. 15)でも述べている。おそらく小野の右腕として松井は期待されていたのであろう。しかし、松井の以上の記述が、事実であったかどうか、小野の著作や回想談の中に見出すことはできないし、また大学の事務部門に照会したが確認できなかった。おそらく松井の留学時の小野との内々の了解事項程度のものであったのかもしれない。もし松井が帰国し、文学部に「図書館学科」が実現していれば、本学司書課程の歴史の一大画期になったであろう。とにかく「幻の図書館学科」に終わった話である。

- (4) 松井正人「日米比較ライブラリアンシップ考—主として米国の大学図書館事情を中心に—(述)」『同志社大学図書館学年報』12号、1986、p7~8、ここで松井は、「この書誌によってハワイ大学図書館は全国的規模において resource sharing に大きな貢献をしていると自負しています。」と述べている。
- (5) 松井の授賞式での松田ハワイ大学総長の松井の功績についての言葉は次のようなものであった。「松田ハワイ大学総長は「松井博士はハワイ大学に大きな足跡を残した。ライブラリー・スペシャリストとして博士の影響と其の恩恵はハワイ大学のみならずハワイ州、ひいてはアメリカ全土に及んでいる」と、称賛の辞を惜しまなかった。」(『チャレンジャー 泣き笑い米国留学三十年 第一回』『図書新聞』1994. 8. 4)
- (6) 松井正人「恩師・小野則秋先生を偲ぶ」『同志社大学図書館学年報』14号、1988、p17
- (7) 松井を同志社大学に招へいした渡辺信一教授は、講演を聞いた感想を「あとがき」『同志社大学図書館学年報』12号、1986、p129で次のように書いている。「それにしても academic status が保障されているとはいえ、日常業務よりは専門的業務としての書誌編纂や個人研究にかなりの時間が許され、しかも研究者として業績を世に示すことが図書館員の社会的評価を高めるものとして、大学当局に歓迎される立場にあることは、うらやましい限りです。」と。私も同感であるが、それにしても昨今の大学図書館における委託などのアウトソーシングによる業務と職員組織の空洞化を見るにつけ、彼我の違いを痛感するのである。

〈自著〉

(図書)

『我が青春のアメリカ～挑戦～』日本図書センター、1991

『薩摩藩主島津重豪：近代日本形成の基礎過程』本邦書籍、1985

『Japanese performing arts: an annotated bibliography』Center for Asian and Pacific Studies, Council for Japanese Studies, University of Hawaii, 1981

『Shimazu Shigehide, 1745-1833: A case study of daimyo leadership』University Microfilms International, 1983

(論文)

「断片・アメリカ大学放浪記」『同志社大学図書館学年報』10号、1984

「日米比較ライブラリアンシップ考—主として米国の大学図書館事情を中心に—(述)」『同志社大学図書館学年報』12号、1986

「恩師・小野則秋先生を偲ぶ」『同志社大学図書館学年報』14号、1988

「チャレンジャー 泣き笑い米国留学三十年」(『図書新聞』第一回～第三十一回、1994. 8. 4～1995. 5. 25)

【8】栗原均（くりはら・ひとし）－挑戦と自律の精神で日本図書館協会の発展に大きく貢献する（1926～2011）

〈大阪府立図書館時期（1948～72年）－新事業に挑戦し、功績を残す〉

1926（大正15）年神戸市に生まれた。県立第一神戸中学校、海軍兵学校をへて、1948（昭和23）年4月に大阪府立図書館に自動車運転手として就職した。図書館勤務のかたわら1950（昭和25）年に同志社大学商学部編入学し、1953（昭和28）年に卒業した。大学在学中、結核療養のため1年間留年した。

栗原にとって図書館は偶然就職したところであったが、大阪府立図書館での24年間は「現場の図書館員」としての基礎を形成した時期であり、「一生の図書館員を志す」に至った時期でもあった¹⁾。彼は、この時期幾多の新事業にたずさわって、その後の府立図書館の進路を形成した一人となった。彼の本領である現場重視主義はこの頃獲得されたものと思われる。また栗原は学校で図書館学を学んだことはなかった。この点既成の図書館学を教科書とする理論家とは違って、あくまで現場の実践活動の中で図書館のあるべき姿を模索し、それを自分なりに理論化していった。この姿勢は終生変わらなかったと思える。これは彼が日本図書館研究会、図書館問題研究会等の組織活動の中に積極的に参加し、多くの理論家と切磋琢磨したことにより深められたであろう。彼は、戦後全国の公共図書館が市民に奉仕する新しいサービスを模索した時代に大阪においてその一端を担った一人であったと言えよう。

以下栗原が実践した主な活動を記すが、当時にあつてはすべての活動で先駆者の一端を担っていた。最初巡回文庫係に所属し、自動車文庫とブックステーションの運営にたずさわって府下を巡回する。これは戦後大阪で誕生した多くの公立図書館の地ならしの役割を果たした。1959（昭和34）年に開設された「参考室」の初代室長になった。ここで栗原は熱心にレファレンス業務についての研究と連携を模索した。その代表的なものが1961（昭和36）年～1962（昭和37）年の「主題別閲覧室制度」の開設への関与であった。また「図書館友の会」にも関与した。「図書館問題研究会」の創立にも参加した。1966（昭和41）年アメリカへ図書館事情視察に行き、アメリカの自動車文庫を研究した。この在米体験は、栗原の国際視野を広げるのに大きな力となった²⁾。

大阪府立図書館における職歴は、貸出文庫係長、参考係長、閲覧第一係長、巡回文庫課長、閲覧課長、整理課長、主幹兼整理課長、主幹（1977年復帰後）を歴任した。かたわら桃山学院大学の司書講習非常勤講師（1961年）および大阪樟蔭女子大学の図書館学非常勤講師（1968年）を務めた。また日本図書館研究会において、理事、評議員を歴任した。

〈堺市立図書館時期（1972～77年）－地域の拠点としての図書館づくりに励む〉

1972（昭和47）年堺市立図書館長となった。1973（昭和48）年大阪公共図書館協会会

長に就任した。1974（昭和49）年図書館界代表として大阪府社会教育委員となった。堺市図書館将来計画を作成・発表した。1975（昭和50）年日本図書館協会監事になった（1978（昭和53）年まで）。図書館前庭に郷土文化の振興のために河井醉茗と与謝野晶子両詩碑を建立した。

〈日本図書館協会時期（1978～2001年）—全国を舞台に大事業に挑戦〉

1978（昭和53）年3月日本図書館協会常務理事及び事務局長に就任した。1993（平成5）年理事長に就任し、2001（平成13）年まで務めた。

栗原の生涯でその経営手腕がもっとも発揮されたのは日本図書館協会時代である。また生来のチャレンジ精神と自律精神をもって事務局長、理事長としての23年間、協会が長年課題としていた難題を処理し、様々な新しい事業を展開した。彼は事務局長として、1983（昭和58）年に理事長に就任した国立国会図書館の高橋徳太郎（1983～1993年、協会理事長）と良きコンビを組んで、1981（昭和56）年～1982（昭和57）年の「図書館事業基本法（振興法）」立法化運動、1986（昭和61）年の「第52回国際図書館連盟（IFLA）東京大会」実施、1992（平成4）年の「日本図書館協会創立100周年記念」行事などの難事業の推進に先頭に立って奮闘した。これら大事業の推進には、強力なリーダーシップと調整能力が要求されたが、縁の下の力持ち的栗原の力が大きかったと思う。この中で、「図書館事業基本法」立法化運動は失敗に終わったが、国の責任における図書館振興を要求した戦後初めての一大運動であった点と、各種図書館の全国組織を網羅して日本全体の図書館発展を図ろうと試みた点に意義が認められよう。国際図書館連盟（IFLA）東京大会も図書館界をあげての一大事業であったが、世界の図書館を身近に感じさせ、自らの弱点や課題を認識させ、また国際化への取り組みを実質化させる良い経験になった。

栗原は理事長退任時に、「協会理事長を退任するに際して」（『図書館雑誌』2001. 8）なる文章を発表している。その中で、日本図書館協会時代の経験を「次々に迫られる協会の歴史にとっても記念すべき課題に際会し、挑戦できたことは幸いでした」と述べ、次の六つを大きな課題であったと指摘している。それは、①1980（昭和55）年の「図書館法制定30周年記念式典」と「図書館功労者の文部大臣表彰」、②1982（昭和57）年「日本図書館協会創立90周年記念行事としての『図書館年鑑』創刊と永井道雄会長就任」③1986（昭和61）年の「第52回国際図書館連盟（IFLA）東京大会」の開催、④1992（平成4）年「日本図書館協会創立100周年記念」行事と協会100周年記念史としての『近代日本図書館の歩み』（本編、地方編）の刊行、⑤1998（平成10）年「協会新会館」建設・完成、⑥2000（平成12）年日本図書館協会の新会長に長尾眞氏推戴、をあげている。これらを見ると、栗原が活躍した時期は、まさに1970年代以降日本の公共図書館が「中小レポート」を受けて真に市民のための図書館に変革されようとした時代と重なっている。

この変革期において、協会は内部的には、事業部の廃止（図書館流通センターへの業務移管）等で財政問題の解決を図り、また定款改正等で組織の再編を図り、ついには1998（平成10）年の「協会新会館」でスペース問題を解決しようとした。また外部的には、『図書館年鑑』創刊等で情報公開を積極的に図り、図書館法の実質化のために努力し、情報化とグローバル化に対応すべき事業も展開し、日本の図書館振興の全国的元締め及び推進役としての役割を果たした。もちろんこれらの事業には、賛否両論があったし、またこれらの事業が栗原一人がなしたものではないのは勿論である。そこには、高橋徳太郎理事長はじめとする協会の歴代の理事、評議員、職員達、また協会の会員一人一人、さらには文部科学省や出版界など外部関係団体の協力があつてこそ実現したものであった。しかしこの時代栗原というきわめて柔軟な経営手腕と優れたリーダーシップをもった人物がいたからこそ諸事業が実現したのもまた事実であろう。

栗原は、退任後「図書館の学校」理事長など努めた。2011（平成23）年11月逝去した。

〈注〉

- (1) 栗原は、大阪府立図書館から日本図書館協会に移った時の心境と図書館員としての心構えを次のように述べている。「もちろん、一生の図書館員を志したものとしては寂しいことではあった。だから職員には‘私は長い間図書館現場におった。現場の図書館員というのは市民、来てくれる利用者にサービスをする、その人のために働く仕事人である。我々協会事務局は、そのような全国の図書館員、現場で市民のために働いている図書館員にサービスを尽くす人間だ。その姿勢と気持ちは同じだ。’ということは何遍も言いました。」（「栗原均ロングインタビュー」『ず・ぼん』9号、p152）
- (2) 栗原は、1966年3月～8月、米国国務省招聘により、米国図書館事情視察旅行を行った。オハイオ州デイトンの公共図書館で自動車文庫の研究をしたりした。アメリカの図書館員から「学ぶことが多かった」と回想している。『ず・ぼん』9号、2004. 4、p141-145

〈自著〉

- 「石山氏の疑問に答える―主題別閲覧室制実施館の側より」『図書館雑誌』57（6）、1963. 6
- 「アメリカにおける図書館間相互協力の発展」『図書館雑誌』61（1）、1967. 2
- 「戦後公共図書館における人事行政と専門職制度」『図書館界』22（6）、1971. 3
- 「昭和40年代の公共図書館行政」（『昭和40年代における図書館・図書館学の進歩』）『図書館界』28（2・3）、1976. 9
- 「図書館事業振興法（仮称）について 報告1～9」『図書館雑誌』75（12）～76（2）、1981. 12～1982. 2
- 「図書館員を志す人たちのために（述）」『同志社大学図書館学年報』9号、1983
- 「日本図書館協会の将来」『現代の図書館』21（3）、1983. 9
- 「故中村祐吉館長と大阪府立図書館」『大阪府立図書館紀要』22号、1986. 3
- 「国際図書館連盟（IFLA）東京大会の報告」『青少年問題』33（12）、1986. 12
- 「図書館、図書館員は何かができるか―震災地を歩きながら考える―」『同志社大学図書館学年報』21号、1995

「協会理事長を退任するに際して」『図書館雑誌』95（8）、2001. 8
その他、雑誌論文記事多数あり。

〈インタビュー〉

「先生、コーヒー飲みにいきましょう」（同志社人訪問22）『同志社大学通信』41号、1982. 10
栗原均・東條文規・堀渡他「栗原均ロングインタビュー 異色の図書館人栗原均 関西の現場から
図書館協会へ 経営的手腕を発揮」『ず・ぼん 図書館とメディアの本』9号、2004. 4

〈参考文献〉

『近代日本図書館の歩み 本編』日本図書館協会、1993（Ⅱ戦後の日本図書館協会、第三章「栗原時代」収録）
益田忠夫「特別寄稿 栗原均さんの力」『ず・ぼん 図書館とメディアの本』9号、2004. 4
塩見昇「特別寄稿 行動の人、そして温情の人」同上書
塩見昇「栗原均さんのご逝去を悼む」『図書館雑誌』106（3）、2012. 3
前田悦子「思い出の中の栗原さん」同上書
雨森弘行「情と熱の人栗原さんを偲んで」同上書
小川俊彦「もう一度楽しい酒を」同上書
石塚栄二「栗原さんを偲んで」『図書館界』63（6）、2012. 3
益田忠夫「人の輪をひろげる～堺時代の栗原均さんを偲んで～」同上書

（うじごう つよし。社会学部教授）